

蔡李佛の歴史

張炎（1824－1893年）は廣東省、新會縣の石咀村で生まれた。彼は幼少期に武術を学ぶことを志し、少林寺の僧であり南派拳術李家拳の達人である李友山からカンフーを学んでいた。張炎の両親は彼が幼少期に何者かに殺害され、以後彼の叔父である張昆の下で暮らすようになった。しかし、張昆は仕事のために町を離れなければならなくなり、張炎の先生である李友山の元生徒で旧友の陳享にお金を払い張炎を預けることにしたのであった。陳享は京梅郷と言う村の近くに住んでいて、カンフーの教官であった。

陳享（1815－1875年）は新會縣の京梅郷で生まれた。彼は叔父で少林寺の共通の弟子でもある陳遠護からカンフーを学び始め、懸命に修行したおかげでかなりの腕前になっていた。ある日、陳享は別の先師がこの村に教えに来ることを耳にした。その先師とは李友山であった。陳享はこの新しい師の下で修行し、カンフーだけではなく少林寺にまつわる多くの故事や歴史なども学んだ。中でも、少林寺の崩壊から脱出した五人の南拳五祖の故事にとっても興味を持ち、羅浮山の近くに住んでいた南拳五祖のうち一人である蔡福禪師を見つけだした。陳享はこの先師を探すために、彼の師匠達から許可をもらい、この僧を見つけてカンフーを教授してもらった。彼はカンフーの純粋な真髓を学ぶことのできる才能を発揮し、蔡家拳の先師である蔡福禪師の下で何年もの間、少林カンフーを学んだ。数年後、陳享は蔡福禪師の下から去り、江門市、順徳縣の陳村で教練の教官として迎えられ、村民に自衛のためカンフーを教えることになった。彼は彼が習ったもの、そして彼自身が作った新しい体系を用いてそこに道場を開いた。

張炎が叔父の紹介で陳享に出合った時、彼はカンフーを習いたいと願い出た。張炎はまだ若かったが、陳享の前の師である李友山の下で修行した経験があった。陳享は張炎の願いと彼の親しい同門生と会う喜びを感じていたが、彼にカンフーを教えることには問題があった。それは、陳村では教練指導官が村民以外の人間にカンフーを教えることが禁じられていたからだ。陳享にもこの規則が適用されたが、張炎を練習場での掃除や整頓などの雑用係として受け入れることにした。張炎はまだ12歳だったが修行したい願望は人一倍あり、彼はなるべくみんなの近くで働き、練習を盗み見続けたのであった。そして彼は毎日練習を見続けることで徐々に技を覚えていった。つまり張炎はひそかに技を盗み見ながら修行していたのであった。このことを知った陳享は激怒したが張炎は今まで技を見て盗んだことについて正直に話し許しを請うた。それから陳享は彼に何を学んだかを尋ねると、張炎は今までに練習したものを披露して見せた。その成果、そして張炎の大望に陳享は密かに彼を鍛え導くように心動かされた。そこで陳享は張炎を夜間に指導し、張炎も昼間の練習場で他の生徒からいじめられても、決してそのことを皆に明かすことはしなかった。それから五年の月日が流れ、張炎は陳享から全ての技を学び終えた。

ある日、陳享はホールで練習している弟子達を残し出かけてった。弟子達は張炎がいつものように働いているのを見て、この部外者に恥をかかせてやろうと試合を強制したが張炎は断った。弟子達は張炎を臆病者だとののしり張炎が我慢できないくらいにまで侮辱し、とうとう張炎はこの挑戦を受けてしまった。結果、弟子達は叩きのめされ、彼らは無数のあざを作ってしまった。そのため張炎が密かに習っていたと言う秘密がばれてしまい、陳享が帰って来た時、村民以外にカンフーを教えたということで責められてしまった。村民達はこの門外不出の伝統を破ったことに激怒し、陳享に考える余地を与えることなく張炎を村の平和維持のため追放してしまった。しかし陳享は以前、蔡福禪師の下で修行していた時に、より技術の高い、ある別の先生が存在を知らされていた。陳享自身その先生を探す機会には得られなかったが、張炎にこそその機会を託そうと思ひ、張炎を青草僧の下で修行させるために紹介状と共に廣西の八排山にある闡建寺へ送った。青草僧は熟練された先師であり、少林寺の崩壊から免れた生き残りの一人でもあった。青草僧は至善禪師の下で九蓮山少林寺に新しい寺を建設しそこに一人で住んでいた。張炎は指示されるままに出発し、寺院で青草僧を見つけだし、弟子として受け入れてもらった。1841年から1849年までの8年間、張炎は殺人技である佛門掌を学んだ。青草僧は張炎に佛門掌の秘儀を全て授けた。そして医学の知識および反清復明の思想を張炎に教えた。月日が経つのは早く、張炎の修行は完了した。青草僧は洪門社会の一員であり彼自身も革命家であった。青草僧は張炎に「鴻勝」という名前を授けた。この名前は実は「洪の勝利」を意味しているのだが、「洪」の代わりに中国語では同じ発音である「鴻」を用いてその意味を隠した。そして寺を去るよう言い渡し、同土や愛国者に連絡を取り明の復活のため戦うように命じた。

張鴻勝（張炎）は太平天國革命に加わり革命戦争、そして革命家達の育成に残りの人生を捧げた。しかしその前に張鴻勝はまず京梅郷に戻った。そこでは陳亨が暖かく張鴻勝を歓迎してくれた。この再会で張鴻勝は陳亨から以前、世話をしてもらったことに感謝の意を表し、青草僧から学んだものを陳亨に伝えた。そしてこの技術の交換の中で、新しい方法が見つかった。二人の先師によって分けられた技術体系、修行方法、それらはそれぞれ独自に発展して行った。彼らのカンフーには蔡福禪師の蔡家拳、李友山の李家拳、そして青草僧の佛門掌の3つの源流があることから、尊敬と敬意を表してこのカンフーの名称を「蔡李佛」と名付けた。張鴻勝は彼の道場「鴻勝館」で教え、陳亨は「洪聖館」で教えた。これらは同じ源流を共有しているが、この2つの蔡李佛の道場のバランスがそれぞれの特徴、属性を独自に発展させていった。しかし常に少林寺のルーツに定着し、互いに近い存在を保ち続けているのは時代が流れても変わってはいないのである。